

中央アジアのオアシス国家と人口問題

宮崎純 一

一

先に私は、中央アジアの農業問題について、トルファン・カラシャール・クチャ・カシュガル・コータンの五地域を主として文献的側面から考察した⁽¹⁾。しかし最近、農業史に限らず社会史の研究に関しては、その地域を成立させている背景の自然的条件・社会的条件を研究することが必須であろうと考えるに至った。

周知の如く中央アジア出土文書―特にトルファン文書―に対する文献的研究は急速に発展し、多くの注目すべき結論が発表されている。しかし一面からいえば最近は文献的に精微を極めることを目標とするの余り、考古

学・民族学・地質学・気候学・土壌学などの基礎的知識をも踏まえた総合的研究はあまり行われていないのが実状なのである。いわば中央アジア史では学際研究に多少遅れているとの懸念を持たざるを得ないのである。

本論文は、中央アジアのオアシス国家と人口問題を文献的側面と自然的条件・社会的条件との吻合を図った試論であることを予めお断りしておきたい。

二

人口問題は最も自然条件に規制される問題である。したがって順序として中央アジアの自然条件を考えておきたい。まずトルファン⁽²⁾から検討しよう。

トルファンは、中央アジアの中で最も有名な古都の一つである。トルファンとはウイグル語で「低地」を意味する。漢代に高昌郡が築かれ、中央アジア経営の拠点となつて一時、高昌国が繁栄したが、一〇世紀のウイグルの進出によつて廃墟と化した。唐代には西州、元・明代には火州と呼ばれた。現在、人口は二一万人。ウイグル族が多数を占める。では以下トルファンの自然条件について述べよう。

(1) 気温。月平均気温の最高・最低値は七月に三二・七度、一月にマイナス九・五度で年平均気温は一三・九度であり、気温の年較差は四二・二度である。七月の平均最高気温は三九・九度で極めて高く、一月の平均最低気温はマイナス一四・五度で較差は大きい。七月の平均最低気温は二五・一度で半月以上が熱帯夜であり、一月の平均最高気温はマイナス三・一度で連日永点下である。

現在までの最高気温(極値)は一九四二・五三・五六年の七月二十四日に四七・六度を記録している。この値が中国での公式な最高気温である。一

方、最低気温(極値)はマイナス二八・〇度であり、砂漠気候としても極めて厳しく、較差七五・六度は世界でもトップクラスである。砂漠ではもっと高い気温がイランやサウジアラビアなどにあり、また低い気温も多くの地方にあるが、砂漠は概して北緯・南緯の20〜35度地帯に多く分布しているため、冬季の気温はこれほど低くない。たとえ気温の低い所があつてもその場所の夏の気温はそれほど高くない。したがって、トルファンは砂漠での夏の暑さと冬の寒さを考慮すると世界でも類を見ない最も厳しい場所の一つであると考えられる。これは天山山脈の山の高さとトルファン盆地の海面下の低さおよび地形によるフェーン風の発生と乾燥が関与するためである³⁾。

(2) 降水量・蒸発量。月降水量の年間の最大・最小値は六月に三・三ミリ、二月に〇・三ミリで、年降水量は一六・四ミリであり、ほとんど雨が降らない。なお、托克遜^{トクソン}では年降水量が三・九ミリである。一日に降った雨量が、トルファンで三六・〇ミリに達し

たことがある。年降水量の二倍以上が一日に降ったことで、年・月平均値が統計的に大きく変わったことであろう。このように降ると砂漠では大洪水ということになる。年間の蒸発量は二八三七・八ミリが多い。夏季の乾燥期には小型蒸発計で測った一日の蒸発量が三〇ミリを超えることがあり、異常に多い。以上で、トルファンの気候が極めて厳しく少雨であるのは、フェーン風などによるものであることが分かるであらう。

それでは、クチャ・カシュガル⁽⁴⁾⁽⁵⁾の気候はいかなるものであろうか。次にこの点を検討しよう。

(1)クチャの気候。クチャ（北緯41度43分・東経82度57分・標高一〇九九・〇メートル）の気候を示す。

月平均気温の最高・最低値は七月に二五・八度、一月にマイナス八・一度で、年平均気温は一・五度である（三十年平均値…二五・九度・マイナス八・四度・一一・四度）。現在までの最高気温（極値）は三九・三度、最低気温（極値）はマイナス二四・六度である。

月降水量の最大・最小値は七月に一一・五ミリ、十二月に〇・五ミリで、年降水量は五〇・四ミリである（三十年平均値…一三・一ミリ、一・三ミリ・六四・八ミリ）。日最大降水量は二九・〇ミリ・年降水日数は二七・七日である。

(2)カシュガルの気候。カシュガル（北緯39度28分・東緯75度59分・標高一二八八・七メートル）の気温を示す。

月平均気温の最高・最低値は七月に二五・七度、一月にマイナス六・〇度で、年平均気温は一・七度（三十年平均値…二五・八度・マイナス六・四度・一一・七度）である。現在までの最高気温（極値）は三八・六度、最低気温（極値）はマイナス二四・二度である。

月降水量の最大・最小値は五月に一九・一ミリ、十二月に〇・五ミリで、年降水量は六一・四ミリ（三十年平均値…一四・〇ミリ、一・六ミリ、六一・五ミリ）である。日最大降水量は三一・九ミリ、年降水日数は二四・三日である。

右の点から見て、クチャとカシユガルの氣候の共通性
 がかなり見出せるであろう。少なくとも、トルファンの
 ように世界で類を見ないほど厳しい氣候ではなく、特に
 カシユガルは比較的安定しているようである。

ところで以上述べてきたのはタリム盆地北辺ないし西
 辺のオアシス国家であるが、タリム盆地南辺のコータン
 の自然条件はいかなるものであろうか。以下この問題に
 ついて考えよう。

コータンはタリム盆地南辺に位置し、人口は一二万人
 余^⑥。そのうちウイグル族が八三%を占める^⑦。崑崙山脈か
 ら流れ出るユルン・カシユ川と、カラ・カシユ川に
 狭まれ、広大な農耕地が広がっている。養蚕・米作・綿
 作など農業が主であるが、また玉と絨毯の産地としても
 名高い。では以下コータンの氣候について述べるが、こ
 こではコータン東方の于田を含めて考えてゆく。

(1) コータンの氣候。コータン（北緯37度08分・東経79
 度56分・標高一三七八・六メートル）の氣候を示
 す。

月平均気温の最高・最低値は七月に二五・三度、

一月にマイナス五・二度で、年平均気温は一二・一
 度である（三十年平均値…二五・五度、マイナス
 五・六度、一二・二度）。現在までの最高気温（極
 値）はマイナス二一・六度である。

月降水量の最大・最小値は五月に六・一ミリ、十
 二月に六・二ミリで、年降水量は三二・一ミリであ
 る（三十年平均値…七・〇ミリ、〇・四ミリ、三
 三・四ミリ）。日最大降水量は二六・六ミリ、年降
 水日数は一七・五日である。

(2) 于田の氣候。コータンの東方の于田（北緯36度52
 分・東経81度40分・標高一四二七・〇メートル）の
 氣候を示す。

月平均気温の最高・最低値は七月に二四・七度、
 一月にマイナス五・五度で、年平均気温は一・五
 度である。現在までの最高気温（極値）は三八・七
 度、最低気温（極値）はマイナス二三・六度であ
 る。

月降水量の最大・最小値は五月に一〇・五ミリ、
 十月に〇・〇ミリで、年降水量は四八・八ミリであ

る。

以上で、コータン地域の紹介を終るが、コータンの方が于田よりも水の供給・氣候の両面において安定していることが分かるであろう。一言にしていえば現代におけるオアシスとしての条件はコータンの方にあるといえよう。

以上中央アジアのオアシス国家の自然条件を水と氣候の両面から長々と論述してきたが、要点を端的にいえば、「トルファンの自然条件は極めて厳しいが、カシュガル・コータンは比較的安定し、クチャがその中間に位置している」ということである。

三

一般にオアシス国家の大小強弱を決定するものが、その都市の存在するオアシスそのものの広狭肥瘠にあることは、既に榎一雄氏によって指摘されているが、一步進んで私は、オアシス国家の広狭は水利と氣候の如何によって決定されたものと見るのである。

さて、八世紀以前の中央アジアのオアシスがどこに、

どの位の規模をもっていたものであろうか。オアシスの広狭が河水の量や氣候によって左右されるという自然条件を考慮に入れば、現代の状況をそのまま古代に当てはめて考えることはできない。それは必ず当時の同時代的記録に基づいて考えなければならない。こうした我々のニーズをそのまま満たしてくれる史料はないが、漢書（卷九六）西域伝に、前漢代の東トルキスタンのオアシスの規模を窺わしめる記録がある。以下この記録を表1として摘記し、検討しよう。

この表によると、人口では烏孫・大月氏・大宛が多いが、これらの国々は西トルキスタンに属するので本稿では述べない。東トルキスタンでは龜茲国の一〇万二三九三人が首位を占め、焉耆国の三万八一〇〇人、姑墨国の二万九〇〇〇人、扞弥国の二万三三八〇人、于闐国の二万一七〇〇人、疏勒国の二万六四七人、莎車国の一万九四二二人、鄯善国の一万七〇一二人がこれに次ぐ。

一般人口といわゆる勝兵の数との比率より見ると、一般住民九・八七人に対して兵員一人という渠犂から、一・三四人に一人という郁立師国までいろいろあるが、

表1 漢書(巻96)西域伝にあらわれた戸数・口数・兵数

国名	王城名	現地名	戸数	口数	兵数	口兵数合計	口数と兵数の比例
鄯善国	扞泥城	ミールアン	1,570	14,100	2,912	17,012	4.84
且末国	且末城	チェルチェン	230	1,610	320	1,930	5.03
小宛国	扞零城	チェルチェン西南	150	1,050	200	1,250	5.25
精絶国	精絶城	ニヤ旧址	480	3,360	500	3,860	6.72
戒盧国	卑品城	ニヤ	240	1,610	300	1,910	5.37
扞弥国	扞弥城	ダンドン=ウイリク	3,340	20,040	3,540	23,580	5.66
渠勒国	鞬都城	ケリヤ東南	310	2,170	300	2,470	7.23
于闐国	西城	コータン	3,300	19,300	2,400	21,700	8.04
皮山国	皮山城	グマ	500	3,500	500	4,000	7.00
烏秣国	烏秣城	Kukeyar. Mamuk 地区	490	2,733	740	3,473	3.69
西夜国	呼鞬谷	?	350	4,000	1,000	5,000	4.00
蒲犁国	蒲犁谷	カルガリク・タシユ クルガンの中間	650	5,000	2,000	7,000	2.50
依耐国	——	タシユクルガン付近	125	670	350	1,020	1.91
無雷国	治盧城	ヤルカンド・タシユ クルガンの中間	1,000	7,000	3,000	10,000	2.33
難兜国	——	キルギット	5,000	30,000	8,000	38,000	3.75
罽賓国	循鮮城	ガンダーラ	——	——	——	——	——
烏戈山離国	——	アレクサンドリア (カンダハール)	——	——	——	——	——
安息国	番兜城	パルティヤ	——	——	——	——	——
大月氏国	監氏城	バクトリア (サマルカンド付近)	100,000	400,000	100,000	500,000	4.00

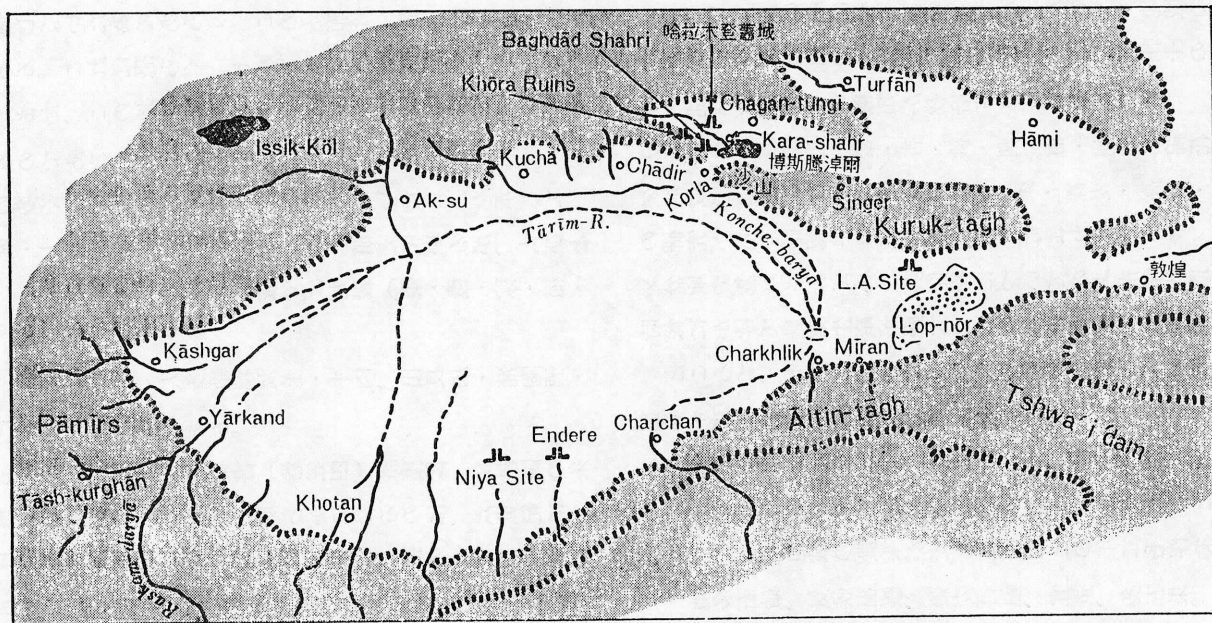
康居国	楽越草地	シル川中下流域	—	—	—	—	—
大宛国	貴山城	フェルガナ	60,000	300,000	60,000	360,000	5.00
桃槐国	—	オシユ	700	5,000	1,000	6,000	5.00
休循国	鳥飛谷	アライ高原	358	1,300	480	1,780	2.71
捐毒国	衍敦谷	イルケシュタム	380	1,100	500	1,600	2.20
莎車国	莎車城	ヤルカンド	2,339	16,373	3,049	19,422	5.37
疏勒国	疏勒城	カシユガル	1,510	18,647	2,000	20,647	9.32
尉頭国	尉頭谷	烏什	300	2,300	800	3,100	2.88
烏孫国	赤谷城	イリ地方	120,000	630,000	188,800	818,800	3.34
姑墨国	南城	アクス	3,500	24,500	4,500	29,000	5.44
温宿国	温宿城	ウチ=トウルファン	2,200	8,400	1,500	9,900	5.60
龜茲国	延城	クチャ	6,970	81,317	21,076	102,393	3.86
烏壘	—	チャードイル	110	1,200	300	1,500	4.00
渠犂	—	クルラ	130	1,480	150	1,630	9.87
尉犂国	尉犂城	カラクム? (コルラ付近?)	1,200	9,600	2,000	11,600	4.80
危須国	危須城	哈拉木登旧城? (khōra 遺跡?)	700	4,900	2,000	6,900	2.45
焉耆国	員渠城	カラシャール	4,000	32,100	6,000	38,100	5.35
烏貪訾離国	于婁谷	マナス	41	231	57	288	4.05
卑陸国	乾当国	フウカン付近	227	1,387	422	1,809	3.29
卑陸後国	番渠類谷	ク	462	1,137	350	1,487	3.25

都立師	国	内咄	台	190	445	331	776	1.34
桓桓	国	城	三ツチ トヤ ンギ ビ地区 イ	27	194	45	239	4.31
薄類	国	疏榆谷	バリ・ホク の東	325	2,032	799	2,831	2.54
蒲類	国	——	ムリ・ホク の東	100	1,700	334	2,034	5.09
西弥	国	于大谷	ウルドウス 谿谷	332	1,926	728	2,664	2.61
東且弥	国	兌虚谷	〃	191	1,948	572	2,520	3.41
劫	国	丹渠谷	?	99	500	125	625	4.00
狐胡	国	車師柳谷	?	55	264	45	309	5.87
山	国	——	沙山 付近	450	5,000	1,000	6,000	5.00
車師前国	国	交河城	トヤ ウル フホ ン	700	6,500	1,865	8,365	3.49
車師後(王)国	国	務	ム	595	4,774	1,890	6,664	2.53
車師都尉国	国	——	?	40	333	84	417	3.96
車師後城長国	国	——	?	154	960	260	1,220	3.69

大局的に見て疏勒国・于闐国などのオアシス国家では、兵員が全人口の中で占める割合が少なく、車師前国ではかなり大きな比重を占め、焉耆国・龜茲国はその中間であるといえるであろう。

以下では、従来から考えられてきた政治史的・歴史地理的視点ではなく、社会圏・生活圏ということを重視す

る立場から、タリム盆地周辺のアアシス国家をトルファン地域^⑪・カラシャール地域・クチャ地域・カシュガル地域・コータン地域の五地域に分けて考えてゆくことにする。



タリム盆地要図 (主として Stein Scrinidia, vol.5 付図による・山本「寄田仰穀考」より転載)

(1) トルファン地域

トルファン地域での農業生産において、水の確保が不可欠であることは、すでに別稿で述べた。^⑬それは、現在ばかりでなく、過去においても同様である。この地域の農業生産について史料上明らかになるのは、六世紀になってからのことで、梁書（卷五四）諸夷伝・高昌国の条に興味深い一節がある。

備植九穀、人多噉麵及羊・牛肉、出良馬・蒲陶酒・石塩。

これは、トルファン地域では九穀（黍・稷・秫・稻・麻・大豆・小豆・大麦・小麦）を植えているが、人びとの多くは、麵や羊・牛の肉を食べていたことを示しているのである。

また、この地域では、ブドウ酒も産出していたようである。これは恐らく、トルファン地域がブドウの生産に適していた為であろう。この一節は、南史（卷七九）夷貊下・高昌国の条にも採録されているが、これは梁書の記事を基にしたと考えられる。

さて六世紀後半から七世紀初頭になると、農業生産を窺わせる史料も多くなる。まず隋書（卷八三）西域伝・高昌国の条には、

地多石磧、氣候温暖、穀麥再熟、宜蚕、多五果。

とあり、この地域の農業が麦と夏作物との年二毛作であったことが分かるのである。麦はかなり肥料を必要とする為、その再熟は考え難く、夏作物としては、黍・粟・稻等が考えられる。

ところで、トルファン地域が高昌郡時代から唐の西州時代にかけて農業生産が盛大であったことは、トルファン盆地で栽培されていた農作物についての考古学的遺物の研究からも確認されている。それによれば、トルファン地域では麦（大麦・小麦）・粟・黍・裸麦・高粱・黑豆・瓢箪・真桑瓜・棗・杏・桃・梨・梅・胡桃・綿花・麻・胡麻など多くの種類が栽培されていたという。^⑭

ところで、新出のアスターナ・カラホージャ出土のトルファン文書の中にも、このようなトルファン地域の豊かな農業生産を支えた水利灌漑に関する文書が存在する。それは五世紀に限定すると四件が知られている。

尚、これらの文書は、いずれも官文書であり、公権力の灌漑に対する関わり方を示すものである。ここでは、高昌郡時代の三件の文書を取り上げることとする。

その一つは、高昌郡の兵曹とよばれる軍事担当部署の文書の中に見えるもので、カラホージャ九一号墓から出土している。この文書は、前後ばかりか中ほとんど欠けており、ちょうど年月日を記した部分が失われている。ただ、この文書の末尾に署名している役人たちの名前や、同じ墓から出土した文書のうち年号が書かれているものなどから推定すると、北涼の第二次高昌郡時代（義和三年＝四三三年前後）のものと思われる。その一部を紹介すると、次のようである（上の数字は行数）。

1、——右の八つの幢（北涼の軍の単位）が中部屯田を管理する。屯田に駐屯する日には、幢（幢の長も幢という）は（配下の）校将一人と一緒に兵士十五人を選抜して夜とどまりて、

2、水路（溝渠）を準備する。残りの校将一人は、残った兵士と当直の犬を率いてそのまま準備する。

3、兵曹掾の張預と兵曹史の左法疆が申し上げる、

「明日、水を引き、二つの部を灌漑すべきである」と。（以下、略）

ここに見える幢とは、兵士一〇〇人程度で構成される北涼における軍事組織の基本的な単位であり、またその責任者の呼び名でもある。ちなみに、兵士の来源は、民間から徴発による場合と、謫戍（てくご）といふ罪を得て守備に付けられる場合との二通りがあった。右の文書によれば、八つの幢によって中部屯田が管理されていたことが分かり、さらに幢と校将一人が兵士一五人を率いて、夜間におそらくは盗水を警戒する目的で水路（溝渠）の守備を行っていたことは明らかであろう。

また、この文書は、その他の出土文書の様式に照らしてみると、郡の役人である兵曹掾と兵曹史が述べた内容は、すでに高昌太守の聴許を経て、施行されることになっていたと考えられる⁽¹⁵⁾。したがって、この文書は、同一日に一斉に水を引き、二つの部（おそらくは督郵とよばれる県を監察する郡の役人の担当範囲の二地区）に所属する耕地を灌漑せよという命令が出たことを意味している。以上の事実から、高昌郡における灌漑施設の維持・

管理及び水の分配などは、すべて高昌太守に委ねられていたと考えられるのである。

あとの二点の文書は、いずれもアスターナ三八二号墓から出土したもので、そのうちの一点には縁禾十年（四四一）の年号が見え、闐爽の時代（四三五—四二二）のものであることが分かる。¹⁶ 他の一点には年号がないが、文中の表現・内容などから同じ時期のものと考えられ、基本的には北涼・高昌郡時代の水利灌漑に関する管理を踏まえているものとみなして差しつかえない。¹⁷

まず、縁禾十年の文書には、「行中部水」「行西部水」という水利灌漑を担当する官職（以下、行水官という）が見え、この中では、これら行水官の変更が記されている。但し、いずれも専任し行水官ではなく兼任である。¹⁸ また、もう一つの文書には、ブドウ園への灌漑を担当する「行中部蒲陶水（蒲陶と葡萄は同じ）」などの官職の任命について記されている。行水官に任命されているものの中には、鎧曹参軍・金曹参軍という軍府の官吏（高昌太守は將軍の称号を帯びており、軍事関係の役所＝軍府の長でもあった）、及び均役主簿・校曹書佐・掾史曹

（曹史）という郡府の官吏（高昌郡の行政を扱う役所＝郡府の長が高昌太守）がいる。さらに県吏もまた行水官に充てられており、いずれも先の「行中部水」などと同時に兼任である。これらの行水官は、あるいは臨時に、もしくは季節的に任命されていたのかもしれない。ここでは灌漑に関わる労働力については触れられていないが、軍府の官吏が関わっていることから、あるいは兵士などの動員や軍事的土木技術の利用などが期待されているのかもしれない。しかも均役主簿や県吏が任命されており、灌漑のときの労働力が一般農民から徴発されていた可能性は大きい。ブドウは、古代からトルファン地域で栽培されてきた果樹の一つであり、ブドウ園への灌漑を管理するための行水官が置かれているところに、この地域の特殊性が認められているといってもよいであろう。¹⁹

これらの事実から私は、高昌郡における水利灌漑は、高昌太守によって弾力的に管理されており、このことはオアシス都市トルファンの農業が、水の確保を前提にして始めて成立していたことを暗示するものと考えるので

ある。

さて、唐代トルファンのオアシス農業については、米田氏の労作に詳論されているので、ここでは述べる必要はないが、要点を端的に言えば、「トルファン農業では、その生命である溝渠は屢々改変を余儀なくされ、それにともなう耕地の割替も度々行われた」ということになるであらう。

(2) カラシャール地域

カラシャール地域の人口に関して、漢書(卷九六)西域伝は次のように記している。

焉耆国、王治員渠城、去長安七千三百里。戸四千、口三万二千一百、勝兵六千人。(中略)西南至都護治所四百里、南至尉犁百里、北与烏孫接、近海水多魚。

焉耆国の位置については、スタインがカラシャール西南の Baghdād-shahri 遺址を中心とする地域に比定して以来、定説となっている。焉耆国は、人口三万二〇〇〇人の中央アジアのタリム盆地地方では中程度の規模のオ

アシス国家であったようである。尚、この記事の「海」は、山本氏が指摘されるように「博斯騰淖爾」||「敦薨之藪」|| Baghrash-köl のことであらう。⁽²³⁾

この地域の人びとの生活が明らかになるのは、三―五世紀になってからのことで、晋書(卷九七)四夷伝・焉耆国の条に興味深い一節がある。

其「焉耆国」俗丈夫翦髮、婦人衣襦、著大袴、婚姻同華夏、好貨利、任姦詭。

これは、カラシャールの男子は髪を切り、女子は短い衣を着ていたことを示すものであらう。また、当時のカラシャールの人びとは、商業を盛大に行なっていたことが分かるのである。

さて六世紀後半から五世紀初頭になると、この地域的生活状況を窺わせる史料もかなり多くなる。まず隋書(卷八三)西域伝・焉耆国の条には、

其「焉耆国」俗奉佛書、類婆羅門。婚姻之禮有同華夏。死者焚之、持服七日、男子剪髮。有魚鹽蒲韋之利。

とあり、当時のカラシャール地域が仏教圏であったこと

は明白であろう。また「剪」は「翦」の俗字であることから、カラシャルの男子の習俗が、三一五世紀と変わらなかったことに注意すべきであろう。このことは、中央アジアのオアシス国家では、政治的にかなり変動しても、生活状況はほとんど変わらなかったことを暗示しているのである。

次に七―八世紀のカラシャル地域の水利・生活について、大唐西域記（卷一）に、

「阿耆尼国」泉流交帶、引水為田。土宜糜・黍・宿麦・香棗・蒲萄・梨・奈諸菓。（中略）服飾氍毹、

断髮無巾。

とあり、当時のカラシャル地域ではキビ・麦・ナツメ・ブドウ・ナシ・カラナシなどの果実が生産され、人びとはフェルトあるいは綿織物を着ていたことが分かる。また、旧唐書（卷一九八）西戎伝、焉耆国の条には、

其〔焉耆国〕地良沃、多蒲萄、頗有魚鹽之利。

とあり、新唐書（卷二二一上）西域上、焉耆国の条にも、

「焉耆国」逗渠溉田、土宜黍・蒲陶、有魚鹽之利。俗祝髮氍毹衣。

とあって、渠を^と返め田を灌漑していたことは明らかであろう。

ところで、カラシャル地域が唐代において穀物生産が盛大に行なわれたことは、考古学的遺物の研究からも分かる。それは、黄文弼氏によって焉耆の唐王城で、小麦・^ア谷子・高粱・胡麻などの穀物と、極めて細かい麵粉が発見されたことが報告されていることから明白であろう。²⁴

カラシャル地域があまり自然的条件に恵まれていることは、今世紀初頭の大谷探検隊のフィールドワークにも示されている。渡辺氏は、カラシャル地域の自然的条件について、「カラシャルは湖水に近いためか、蚊が非常に多いので、室内で馬糞を^ふ燻らせて寝るのであるが、馬などはたちまち全身血だらけになるほどで、洋服の上からでも容赦なく刺してくる」と述べている。²⁵このようにカラシャル地域がかなり過酷な自然的条件にかかわらず、特に七―八世紀以前において穀物・

果実生産が盛大であつた理由は、水利灌漑が行われていたことによるものであろう。

(3) クチャ地域

クチャ地域の人びとの生活状況が具体的に明らかになるのは、三―五世紀になつてからのことで、晋書(卷九七)四夷伝・龜茲国の条に興味深い一節がある。

〔龜茲国〕人以田種畜牧為業。

これは、クチャ地域の人びとが農業・牧畜業で生計を立てていたことを示すものである。

六世紀になると、この地域の生活状況を窺わせる史料もかなり多くなる。まず周書(卷五〇)異域下、龜茲国の条には、

龜茲国、(中略)其王姓白、即後涼呂光所立白震後、(中略)其刑法、殺人者死、刳賊則断其一臂、並則一足、賦税准地徵租、無田者則税銀錢。

とあり、当時のクチャ地域では貨幣を納税にまで使用したことが分かるのである。この記事は、クチャ地域の経済活動の盛行を物語るものであろう。また、刑法の規定

が極めて厳格なことも注意すべきであらう。次に、周書はこの記事の後に、

出細氈・麋皮・氍毹・饒沙・塩緑・雌黄・胡粉及良馬・封牛等。

と述べている。これは、クチャ地域では当時、大鹿の皮や良馬を産出していたことを示している。⁽²⁶⁾それは、多分クチャのオアシス国家周辺のステップ地域を指しているのであろう。

七世紀になると、玄奘の報告がある。玄奘はクチャ地域のこととして、

宜糜・麦、有粳稻、出蒲萄・石榴、多梨・柰・桃・杏、土産黄金・銅・鉄・鉛・錫、(中略)服飾錦・褐、断髮巾帽。

と述べている。この地域が、農業や牧畜業の他に、鉱業によってオアシスを維持していたことが分かるのである(大唐西域記卷一、屈支国の条)。他に、新唐書(卷二二上)西域伝、龜茲国の条にも、「土宜麻・麦・稻・蒲陶、出黄金」とあるが、これは玄奘の記事を縮めたものと考えられる。

八世紀になると、慧超の報告がある。すなわち、八世紀初頭この地域を通過した慧超は次のごとく述べている。

從陳勒東行一月、至龜茲国、即是安西、大都護府、漢国兵馬大都集處、此龜茲国、足寺足僧、行小乘法、食肉及葱・韭等也。

この記事によれば、当時のクチャ地域ではネギやニラが生産されていたことは明らかである。

クチャ地域の自然的条件・社会的条件については、今世紀初頭の大谷探検隊の報告にも示されている。渡辺氏は、クチャ地域の自然的条件・社会的条件について、

クチャは天山の麓にあつてよく山が見えるが、（中略）實際、天山には硫黄が非常に多く出て、それが始終燃えているので、煙が絶えず立ち昇っているが、地質学ではどうか知らぬが、純然たる噴火山ではないようである。このほか付近には鉱物は非常にたくさんあり、石炭や石油も多く産出する。またこのあたりには銅の精錬所もあるが、その燃料には皆木炭を用いているので、なぜ豊富な石炭を使わ

ぬかと尋ねたところ、なにぶんにも石炭を用いる熔鉱炉の作り方を知らぬからだとのことであつた。

と述べている。^分この地域では、二〇世紀初頭においても

硫黄・銅などの鉱産資源に恵まれていたことが分かる。このことから、クチャのオアシス国家は、征服王朝の清から中華民国国民政府に政治的に大きく変動しても、社会的状況はほとんど変わらなかったことを示しているといえるであろう。

また、渡辺氏は、当時の生活状況について、

クチャは豊饒の地で、果物がたくさんある。その種類はナシ・リンゴ・ザクロ・アンズなどいずれも美味であるが、あまりたくさんできて食べ切れぬので、土地の人びとはこれをそのまま乾かしておいて、年中食料にしている。桑の木は非常に大木が多く、なかには一かかえぐらいのものもある。しかしなぜか、養蚕は少しも行われていない。その実は多く白色を帯びて、とても甘たうい味である。これが熟して落ちるときは、まるで雨でも降るようである。

と述べている。⁽²⁸⁾このようにクチャ地域は比較的安定した自然的条件を利用して、古代から現代まで果物生産に恵まれていたことが分かるのである。こうしたオアシス国家の性格は、匈奴・柔然・突厥などの遊牧国家よりは比較的安定した停滯国家といえるのであろう。

(4) カシユガル地域

カシユガル地域の生活状況について推定できるのは、漢書(卷九六)西域伝に、

疏勒国、王治疏勒城、去長安九千三百五十里。戸千五百一十、口万八千六百四十七、勝兵二〇人。疏勒侯・擊胡侯・輔国侯・都尉・左右将・左右騎君・詠長各一人。東至都護治所二千二百一十里、南至莎車五百六十里、有市列、西当大月氏・大宛・康居道也。

とある記事からである。これによれば、疏勒国(カシユガル)は人口一万八六四七人で、「市」が列なるオアシス国家であったことが分かるのである。

さて、六世紀後半から七世紀初頭になると、隋書(卷

八三)西域伝、疏勒国の条に当時のオアシスの民と遊牧民との関係を表わす重要な史料が存在するので、次に掲げる。

「疏勒国」土多稻・粟・麻・麦・銅・鉄・綿・雌黄、每歲常供送於突厥。

この記事によれば、カシユガル地域では稻・粟・麻・麦などの農作物や、銅・鉄・錦・雌黄(硫黄と砒素との混合物)などの鉱産資源を産出し、毎年西突厥に供給していたことが明らかである。この記事は、西突厥の不安定性を物語るものであろうが、同時にカシユガルのオアシスの定住民と西突厥という遊牧民とのシンビオシスの関係があったことが分かるのである。そして、このような二つの存在形態は、特に生活面において密接な関係にあったと考えられる。また、玄奘はこの地域のこととして、「稼穡殷盛、花菓繁茂」と述べている。⁽²⁹⁾この地域における農業の隆盛は、時代を超えた基本的姿なのであろう。

八世紀になると、慧超の報告がある。慧超は、カシユガル地域のこととして次のごとく述べている。⁽³⁰⁾

從葱嶺步入一月、至疏勒、外国自呼名伽師祇離國、此亦漢軍馬守捉、有寺有僧、行小乘法、喫肉及葱・韭等、土人著疊布衣也。

この地域では、ネギやニラが生産されていたことが分かるのである。また、当時のカシユガル地域が仏教圏であったことにも注意すべきであろう。また、通典（卷一九二）、边防八、西戎四、疏勒の条にも、「土多稻、粟・蔗・麦・銅・鉄・綿・錦・雌黃」とあり、当時のこの地域の人びとが、農業や鉱工業に従事していたことを窺うことができる。

ところで、カシユガル地域においては考古学的遺物の研究はほとんど行われていないのであるが、今世紀初頭の大谷探検隊の報告にはその理由が具体的に示されている。橘氏は次のごとくいう³⁾。

カシユガルは、中国領中央アジアにおける最大の都會で、人口は約六万あり、政治・経済の中心である。（中略）このカシユガルでは、わたし（＝橘氏）と同様の目的をもって、何人もの外国人が発掘を試みたのだが、昔からの大都會で人口も非常に多

かったに關わらず、めぼしいものは何一つ發掘されていないのである。わたし（＝橘氏）にもその理由は十分には解明できないが、次のように考えることができる。

漢代から今日までこの都會は一度も廢滅したことはなかった。常に大都會としての形態を持続しつつある以上、ことに中古から近世にいたるまで、アラビアにおこった回教徒がしだいに勢力をのぼして、中央アジアに力をもつ仏教を破壊しようとしたに違いない。彼らはいくたびか西方のアラビアからテレク・ダワンの峻嶺を越えて、このカシユガルに攻め入ったので、古代仏教の遺跡もそのとき失われたのだらうか。

橘氏によれば、本来ならば古代仏教の遺跡がカシユガル付近になければならないが、それが失われた理由は、イスラム勢力の中央アジア進出によるということになるであらう。

また、橘氏は、当時の生活状況について、
物産は鉄器その他の細工物で、羊毛獸皮等は中央ア

アジアの各地からいったんここに集まって、また各方面に輸出分配されている。

と述べている。³² 橘氏のフィールドワークと文献的側面とを総合すれば、一般に経済力の豊かなカシュガルのようなオアシス国家では、自然と周辺諸地方から流民が流入しがちで、オアシスで生産できる食糧でまかない得る以上の人口を抱えがちであることが分かるであろう。とすれば、オアシス都市の性格は商業的農業と穀物生産との二本柱のバランスによって成立しているといえるであろう。

(5) コータン地域

コータン地域について、漢書（卷九六）西域伝は次のごとく述べている。

于闐国、王治西城、去長安九千六百七十里。戸三千三百、口万九千三百、勝兵二千四百人。（中略）東北至都護治所三千九百四十七里。南与姑羌接、北与姑墨接。于闐之西、水皆西流、注西海。其東、水東流、注塩沢、河原出焉。多玉石。西通皮山三百八十

里。

この記事によれば、紀元前三―一世紀の于闐国（＝コータン）は人口一万九三〇〇人で、「玉石」を産する比較的大規模な中央アジアのオアシス国家であったことが分かる。

紀元前後においては、コータン地域の政治的状况は比較的安定していたようで、後漢書（卷八八）西域伝、総序に、

建武中（二五―五六）に、「中央アジアのオアシス諸国は」みな使者を遣わして、「後漢に」内属することを求め、「西域」都護を「置くことを」請願した。光武「帝」は、中国が平定した初期で、まだ外国の事までには手がまわらないので、ついにこれを許さなかった。たまたま匈奴が衰弱し、莎車王賢が死んで、「中央アジアのオアシス諸国は」ついにたがいにあい攻伐した。小宛・精絶・戎廬・且末は、鄯善に併合され、渠勒・皮山は、于闐に統合された。「鄯善・于闐は」ことごとくその地方を領有した。

と記され⁽³³⁾、タリム盆地南辺地帯の国々は、鄯善⁽³⁴⁾・于闐に組み込まれていたことが分かるのである。それゆえ、ここではコータン東方のニヤの北にあるニヤ遺址、ニヤ東方のエンデレ遺址及び楼蘭遺址を含めて考えてゆくことにする。

この地域でまず農業生産を推定できるのは、考古学的遺物からである。それは、中国の発掘隊によって民豊県尼雅（ニヤ）から発見された麦・大麦・粟・蔓青（カブ）の遺物で、兩漢・魏晉時期のものとされている⁽³⁵⁾。

このような農業生産の状況は、ほぼこの時期前後のものと考えられるニヤ川・エンデレ旧址・楼蘭遺址から農作物が発見されていることによって分かるのである。

ところで、その中でもニヤ川からは小麦が発見されている。それは、スタインが発見したもので、外皮小麦と小麦の一粒であったのである⁽³⁶⁾。

一方、エンデレ旧址では、小麦一粒が発見されたことが、スタインによって報告されている⁽³⁷⁾。

また、楼蘭遺址では、炭化した小麦一粒とキビの穂などが発見されたが、それもやはりスタインによって報告

されている⁽³⁸⁾。

四―六世紀のタリム盆地南辺のオアシス国家の生活状況を示すものとしては、洛陽伽藍記（巻五）に、

從鄯善西行一千六百四十里、至左末城、城中居民可有百家、土地無雨、決水種麦、不知用牛、耒耜而田。

とあり、左末（＝且末）の地では、極めて降水量が少ないので水を引いて麦を植えているが、牛耕は知らず、鋤で耕作していたことが分かるのである。このことは、当時の且末（現在のチエルチェン）の農業が、粗放なオアシス農業であったことを示している。そのうゑ梁書（巻五四）諸夷伝、于闐国の条には、「氣温、宜稻・麦・蒲桃」とあり、当時のコータン地域では、農作物と果実とが生産されていたことが分かるのである。

六世紀後半から七世紀前半の状況を示すものとしては、隋書（巻八三）西域伝、于闐国の条には、「土多麻・麦・粟・稻・五果・多園林」とあり、主穀作物や林芸作物が生産されていたことが推定できる。

そして七世紀になると、玄奘の報告がある。玄奘は、

コータン地域のこととして、「宜穀稼、多衆集」⁽³⁹⁾と述べている。この地域は、穀物生産や果実生産に適していたことは明らかである。

コータン地域の生活状況については、今世紀初頭の大谷探検隊のフィールドワークにも示されている。橋氏は、この地域の生活状況について次のごとく述べている。⁽⁴⁰⁾

産物としては、玉石・沙金・麝香・生糸織物・果物などがなかなか盛んで、一週一回のわりで市中に大バザール（市場）が開かれるときは、付近の住民がアリのように集まってくるので、市場の賑わいは想像以上となる。（中略）気候は他のオアシスに比べてややおだやかだが、夏はやはり暑い。しかしタクラマカン砂漠中の一大オアシスであるこの地は樹木がよく茂り、果実類も豊富である。ことにブドウの類が最も多く、レーズン（干しブドウ）のごときはこの地の産物中有数のものである。そのほか上等の桃もあればナシもある。ウリもあればスイカもある。

この記事によれば、中央アジアのオアシス都市コータンを中心としたオアシス郊外の農村との生活圏の存在を認めることができるであろう。こうした姿もまた、オアシス都市の時代を超えた基本的姿といえるであろう。橋氏はまた、コータン地域の人口について次のごとくいう。⁽⁴¹⁾

コータンの人口は精密な調査資料がないから正確にはいえないが、およそ二二、三万程度であろう。一八八五年ロシアのブルジュワルスキー將軍がここを通過した時には三〇万と数えているが、それから五年後同じくロシアのブジョゾフ將軍は一六万内外といっている。そうかと思えば、一八九六年にヘディン博士の見たところでは、五二万四〇〇〇と書いてあって、何とも確実なことはいえないが、最近になってスタイン博士は推定で、コータンの人家は約二万七五〇〇とし、これを平均一家八人と見積って二二万と計算している。

橋氏のフィールドワーク・ヨーロッパの諸学者の所説・現在のコータンの人口の三方面から総合的に考察す

ると、スタインの学説が最も穩当であるといえるのではなからうか。

一方、中国においても最近はいグル族の社会調査が行われていて、和田専区の解放前の人口は六万一千二百人と記されている。⁴² もちろん、この資料はオアシス都市コータンの人口ではなく、オアシス郊外の農村部の人口を含めているので、現在はスタインの学説を採用しておくことにしたい。

いずれにしても、コータン地域においても生活圏の存在を特に指摘しておく必要はあろう。

四

全体を概観しよう。

中央アジアの人口問題に関して、最初に総合的な概観をされたのは、榎氏であった。その後、この問題についてはほとんど等閑視されていたのである。もちろん、東トルキスタン近世史の分野においては、堀氏らによる精力的な研究もないわけではないが、それは中央アジアの全体像というよりは一八一二〇世紀のウイグル族に関する

試論なのであった。⁴³

以上までの私の所論は、一言にしていえば、中央アジアのオアシス国家と人口問題を取扱う際には、まず水と氣候を前提としてオアシス国家の性格を説明することができるということである。次に、オアシスの住民と遊牧民との関係については、カシユガル地域の項で見た北方遊牧民である西突厥へ運ばれていったカシユガルオアシスの農産物がこの例であり、そこには対立ではなくシンビオシスの関係が見られたのである。さらに、コータン地域の項で見たオアシス都市コータンを中心としたオアシス郊外から農村との生活圏の存在が推定できた。本論文では、従来から行われてきたトルファン文書を駆使したトルファン地域研究というよりはむしろ、カラシャール・クチャ・カシユガル・コータンのオアシス社会史を今まで余り用いらなかった考古学・民族学などのスタイン・大谷探検隊などのフィールドワークの成果や氣候学などの周辺諸科学の成果を利用することで、若干異見を述べることできた。私の試みが現在の学界の状況に対して他山の石としての役割を果たすことができれば

本論文の目的は達成されるし、中国農業史研究に従事しておられた米田氏への非礼の言い訳にはなるであらう。

註

- (1) 宮崎純一「八世紀以前の中央アジアの農業問題について——ターリム盆地地方を中心として——」 古代文化第三十五卷第八号、昭和五十八年参照。
- (2) 現代のトルファンについては、謝天喜編「今日吐魯番」 新疆大学出版社、一九八八年参照。
- (3) 唐代以前のトルファンのオアシス農業については、米田賢次郎「オアシス農業と土地問題——特にトルファン溝渠の変更と土地の割替を問題にして——」 鷹陵史学第一号、一九八六年、四頁参照。
- (4) 樋口氏の調査によれば、現在のクチャの人口は三〇万人という(樋口隆康「ガンダーラへの道——シルクロード調査紀行——」 旺文社、一九八二年、七二頁)。
- (5) 森川氏によれば、現在のカシュガル市の人口は二二万人弱である(権藤与志夫編「ウイグル——その人びとと文化——」 朝日新聞社、一九九一年、二八頁)。
- (6) 現代のコータンについては、王良志編「和田専区農業調査報告」 維吾爾族社会歴史調査、新疆人民出版社、烏魯木齊、一九八四年、一三—二七頁。
- (7) ウイグル族史に関しては、維吾爾族簡史編寫組「維吾爾族簡史」 新疆人民出版社、烏魯木齊、一九九一年参

照。

- (8) 榎一雄「中央アジア・オアシス都市国家の性格」 シルクロードの歴史から、研文出版、一九七一年、一一六頁参照。
- (9) 松田寿男「古代天山の歴史地理学的研究」 早稲田大学出版部、一九七四年参照。
- (10) 古代中央アジアの言語圏については、主なものとしてソグド語・コータン語・トカラ語の三つをあげることができる。まず第一のソグド語は、西トルキスタンの中心部に当たるソグド地方の言語だったもので、この地方の住民の商業活動が盛んになるにつれて、中央アジア一帯からモンゴリア方面にまで広まっていたものである。第二のコータン語は、コータンを中心としたタリム盆地の南辺地帯で用いられ、第三のトカラ語は、タリム盆地の北部一帯で使われていたものである。もっともトカラ語の場合、トルコ語の仏典の奥書にみえている名称をもとにして、トルファン・カラシャールなど天山山麓の東部地方で使われていたものだけをトカラ語といい、天山西部のクチャ方面で使われていたものはクチャ語として分けて考えるのが普通である(羽田明編「西域」 河出書房新社、昭和四十九年、三三頁参照)。
- (11) 六—七世紀のトルファン地域の農業生産については、宮崎純一「八世紀以前のトルファン地方の農業生産について」 佛教大学大学院研究紀要第十三号、昭和六十年

参照。

- (12) 八世紀以前のタリム盆地周辺のオアシス国家の手工業については、毛織物生産を中心とした山本光朗「八世紀以前のタリム盆地地方の毛織物生産について」東洋史研究第三十八巻第四号、昭和五十五年・棉織物生産を中心とした宮崎純一「八世紀以前の中央アジアの棉織物生産について」佛教大学大学院研究紀要第十号、昭和五十七年参照。

- (13) 註(11)参照。

- (14) 王炳華「新疆農業考古概述」農業考古八十三巻第一号。

- (15) 米田氏は、麴氏高昌国時代の土地所有形態について、土地国有に大略に等しいもの、いわば準国有とでもいへばきものであると述べている。詳しくは米田前掲書、一七頁参照。

- (16) 町田隆吉「五世紀吐魯番盆地における灌漑をめぐる吐魯番出土文書の初歩的考察」佐藤博士退官記念中国水利史論叢、国書刊行会、一九八四年参照。

- (17) 関尾史郎「北涼政權と『真興』奉用——吐魯番出土文書『簡記』——」東洋史苑第二十一巻、一九八二年参照。

- (18) 白須浄真「高昌・闐爽政權と縁禾・建平紀年文書」東洋史研究第四十五巻第一号、昭和五十六年参照。

- (19) 町田隆吉「シルクロードの謎」光文社、東京、一九八九年。

- (20) 米田前掲書、二〇頁参照。

- (21) 嶋崎氏は、トルファン地域のカレーズ技術の起源について、「一八世紀末と推定することは可能である」と西方から伝播した新技術と理解している(嶋崎昌「東トルキスタンに於けるカレーズ灌漑の起源について」隋唐時代の東トルキスタン研究、東京大学出版会、一九七七年、三七四頁)。米田氏も、嶋崎氏の見解に従い、「火焰山南麓のスプリングを主たる水源とする唐代トルファンの水路網はカレーズではなく地表を流れる普通の渠(『溝渠』であった」と推定している(米田前掲書、八頁)。

二〇世紀初頭、トルファン地域を調査したスタインは、「(トルファンの)陥没地内のオアシスが水の供給を得られるのは、わずかにこの隆起帯の麓からだけである。が、水は灌漑の為に最大限に活用されているので、豊かに農作物が実る。実に興味深いことに、こうして確保される灌漑用水は、その大部分が、天山山脈から流れてくる地下水が地表に噴き出した泉の流水ではなく、カレーズと称する——山岳地からの地下水を引く地下井と地下水路の——複雑な機構に頼ったものである。盆地内の風土は、乾燥しきっており、地溝の面が低いために、一年の大半はきわめて暑い。この高温に、泉中とカレーズとによって確保される水の供給が相まって、盆地内のオアシスでは、二毛作さえ可能になっている。このよう

に有利な条件のもとで灌漑されているわけなので、土地の生産力は非常に大きい。穀類をはじめ、果実・綿花にいたるまで、農産物が豊富なのも当然といつてよい。

しかし、これらの農業上の好条件だけでは、何と云つても耕作可能な地域が限られているだけに、現在のトルファンの商業の繁栄とか、歴史書やおびただしい量の廢墟で立証されているような、過去における富裕ぶりとかを充分説明することはできないだろう。実は、このほかに、ここは天山山脈の北の地方と産物の取引きや交換がしやすいという自然の立地条件に恵まれていたのである。天山山脈の北は、湿润な氣候条件で、それによつてトルファンにはない家畜・羊毛などの資源がある。そして、ボグド・オーラ山塊の東西両端には、山道が一年中開通してゐて、交易を容易ならしめているのだ」と述べている(スタイン著・沢崎順之助訳「中央アジア踏査記」白水社、一九七八年、二四二頁)。

スタインのフィールドワークを長々と引用したのは、近現代のトルファン地域でも穀類をはじめ、果実・綿花生産が盛大に行なわれ、二毛作も可能であったことを説明する為であつた。いわばトルファン農業では、穀物・果実・綿花生産が時代を超えた基本的姿といえるであらう。こうした記録と真木氏の教示とを併せ考えると、カレーズの長所と欠点は次のごとくなるのであらう。

カレーズの特長は、

- (1) 水温は年間あまり変わらない。
- (2) 蒸発は少ない。
- (3) 砂ぼこり・ゴミはほとんど入らない。
- (4) 雨水・塩分が入る場合が少なく。
- (5) 蒸留水のように味が悪くなく、ミネラルウォーターである。

- (6) 地下浸透が少なく。
 - (7) 自然流水の為、動力源はいらない。
 - (8) 植物・動物による損失・汚染などの影響が少なく。
- また、欠点を述べると、

- (1) カレーズを掘るのに長年月がかかる。
- (2) 人力やわずかにロバや馬を利用した技術しかない。
- (3) 水量が少なく。
- (4) 侵食で落盤して使用できなくなる。
- (5) 一度汚染すると、なかなか綺麗にならない。
- (6) 水を汲み上げる必要がある。
- (7) 水のロスがある。

(8) 氣候に左右されて、水量が減少することがある。

このように考えれば、カレーズが基本となつた近現代でも、トルファン地域では水が貴重であり、塩害も避けられないことが分かるであらう。現在のカレーズにもそれなりの欠陥が存在することを指摘しておく必要はあらう。

(22) Aurel Stein, *Serindia*, vol. III, pp. 1182—1183.

(23) 山本光朗「寄田仰穀考」史林第六十七卷第六号、一九四年、五二頁。

(24) 黃文弼「新疆考古的發現」考古一九五九年第二期、七八頁。

(25) 渡辺哲信「中央アジア探検談」大谷探検隊・シルクロード探検、白水社、一九八〇年、四九頁。

(26) 隋書(卷八三)西域伝、龜茲国の条にも、クチャ地域の生活状況を示すものとして、「土多稻・粟・菽・麦・饑銅・鉄・麋皮・麋毳・饑沙・塩緑・雌黄・胡粉・安息香・良馬・封牛」と記されている。

(27) 渡辺前掲書、四七頁。

(28) 渡辺前掲書、四八頁。

(29) 大唐西域記(卷一二)佉沙国の条。

(30) 羽田亨「慧超往五天竺伝逐録」昭和十六年、羽田博士史学論文集上巻(東洋史研究会、昭和三十三年)所収。

(31) 橋瑞超「中亜探検」大谷探検隊・シルクロード探検、白水社、一九八〇年、二五三—二五四頁。

(32) 橋前掲書、二五五頁。

(33) 宮崎純一訳「後漢書(卷八八)西域伝、序・跋訳註稿」内田吟風編、中国正史西域伝の訳註(正史西域伝訳註研究会、一九八〇年)所収、四一—四二頁。

(34) 鄯善の生活状況については、註(1)の宮崎論文及び山

本前掲論文を参照された。

(35) 史樹青「談新疆民豐尼雅遺址」文物、一九六二年第七・八期、二五頁。

(36) Aurel Stein, *Serindia*, vol. I, 1921, pp. 250, 252.

(37) *ibid.*, pp. 250, 252.

(38) *ibid.*, pp. 431, 444.

(39) 大唐西域記(卷一二)瞿薩旦那国の条。

(40) 橋前掲書、二五八・二五九頁。

(41) 橋前掲書、二六二頁。

(42) 註(6)参照。

(43) 堀直「一八一〇世紀ウイグル族人口試論」史林六〇巻四号、一九七七年。

〔附記〕

(1) 論文中に言及した、トルファン文書の原文は、繁雑を避けてすべて論文中から削除した。

(2) 本論文については佛教大学教授・杉本憲司氏(中国古代史専攻)に大へん御世話になった。深く感謝する次第である。

(3) 論文中に言及した気候学に対する部分については、農林水産省熱帯農業研究センター環境資源利用部乾燥環境チーム長の真木太一氏に非常な御世話になった。末尾ながら深甚の謝意を表するものである。